

〔研究ノート〕

韓国と日本における 「桃源郷（ユートピア）」の比較

梅 山 秀 幸

2016年5月27日に、本学の提携校である韓国大邱の啓明大学校において、比較文学研究の国際シンポジウムが行われた。そのときの英語発表を日本語になおし、手を加えたものを、ここでは研究ノートとして発表したい。このシンポジウムへの参加依頼を受けたのは、筆者がフランスでの研修をしている最中のことで、発表テーマは何でもいいということであった。ちょうどバリで11月13日の同時多発テロの起こった前後のことである。テロというのも一方の立場からのことばであり、立場を変えれば *djihad*（ジハード：聖戦）ということになるだろうが、ISの若者というの、出身はともかく、国籍はフランスやベルギーの若者であった。その若者たちがみずからの死も辞せずに暴力の先に夢見ている世界はどのようなものなのか、思いを巡らせざるをえなかった。そんなことから、以前から気になっていた、江戸の社会で思い描かれた理想郷と朝鮮の社会で思い描かれた理想郷とを比較して発表要旨を送ったのだが、研修先のコレージュ・ド・フランスには朝鮮関係の資料も充実はしていたものの、やはり十分とは言えなかった。当該研究に先行する研究はかなりの数に上るはずであるが、それに目を通

キーワード：桃源郷，ユートピア，夢遊桃源郷，洪吉童，好色一代男

すことが不可能であった。研究論文と名乗るにはそれら先行研究を一通りは踏まえておく必要があるのだが、忙しさにかまけてそれができないでいる。それがここで研究ノートとして発表をする理由である。

一、安堅の「夢遊桃源図」

けっして胸を張っていえることではなく、忸怩たる思いを禁じずにはいられない事実ではあるが、朝鮮半島の美術作品の優品が数多く日本には存在する。古代の仏像を初めとして、高麗の青磁、朝鮮の白磁、高麗の仏画と数え上げればきりがなが、奈良の天理大学には、朝鮮絵画史上の最高の傑作といわれる、安堅の「夢遊桃源図」が所蔵されている。朝鮮王朝の文物をととのえた世宗大王の第三王子である安平大君・李瑬が夢の中で桃源郷に遊び、その様子を画員の安堅に描かせたものである。判明しているかぎり、この絵の日本における最も古い所有者は島津氏であるから、文禄の役で出遅れて豊臣秀吉の不興を買い、慶長の役では狂気のように全羅道、すなわち韓半島の特に南西部を荒らしまわった薩摩藩によってもたらされたものだと考えられる。この絵画を見ていちやく評価した内藤湖南は、作者の安堅は北宋の郭熙を学んで、真に北宋人の骨法を得た画家であり、その力量において日本の周文にまさり、雪舟でさえも品格においては安堅に一步をゆずっている、と評している。さほど大きな作品とは言えないが、まさに気韻生動として、神妙の域に達した、朝鮮の粋が表現された傑作なのである。

この作品にさらに価値を添えるのは、この絵の注文主である安平大君の自筆の題詞と跋を付し、さらに当時の政治の中枢にあった文人たち二十一名の、それぞれ自筆の詩文を加えていることである。科挙に及第して政治の表舞台に立つ朝鮮の儒者官僚たちはすべてがインテリであり、すぐれた文学者たちであるとともに、すべてが名筆であり、また特に安平大君その

韓国と日本における「桃源郷（ユートピア）」の比較

人が朝鮮史上第一の書家とされている。絵画として、文学として、そして書芸として、この「夢遊桃源図」は三つの分野で朝鮮芸術の頂点を示すことになる。「三絶」ということばは、こういう場合に使われるにふさわしい。

「夢遊桃源図」は芸術作品としてはなほだ興味深いものであるが、この作品を当時の政治状況の中に置いて見るとき、桃源郷という安穩とした題材を扱いながらも裏切って、きわめて緊迫した宮廷周辺の空気を呼吸している作品であることがわかる。この作品が描かれたのは、世宗二十九年（1447）のことであるが、まもなくして世宗が亡くなると（1450）、第一子の李珣（文宗）が即位したものの、在位二年に満たずに亡くなってしまう（1452）。そして、文宗の子の李弘暉（端宗）がわずか十四歳で即位すると、叔父たちの間で政争が起こるのである。1453年、いわゆる「癸酉靖難」によって、世宗第二子の首陽大君・李瑈は第三子の安平大君を追いやって殺し、政治の主導権を握った上、二年後には端宗を廃して、みずからが王位に即き、これに反対する臣下たちをことごとく殺害することになる。王位を廃され魯山君に落とされていた端宗も、さらに庶民に落とされ、それでも危険がわが身に迫っているのを知って、十七歳の若さで自殺した。

騎馬民族国家において特徴的に現れることのようにだが、兄弟たち、あるいは叔父と甥が争いあい、たがいに殺しあって、生き残った者が王になればよい。それが判断力も政治力も胆力も、あるいは残酷ささえもそなえた最も王たるにふさわしい者であろう。実力者が王になるという点で、建前の儒教の教えとは矛盾するものの、初期の朝鮮王朝の在り方はある意味ではすこぶる健全であったといつてよいかもしれない。実際、その残酷さゆえに父王の太祖・李成桂からは疎まれることもありながら、兄弟や甥たちをなで斬りにして返り血をいっぱいに浴びて王となった太宗は名君であつたし、「癸酉靖難」の勝利者である首陽大君（世祖）も後には名君と評さ

れることになる。しかし、そんな王族の争いの中で臣下たちはどうあるべきなのか、むずかしい進退を迫られることになる。「夢遊桃源図」に詩文を寄せた二十一名は、その交流の深浅はあるにしろ、安平大君のサロンに出入りしていた人々である。その中で、安平大君とともに、金宗瑞が殺され、三年後には、朴彭年・李塏・李賢老・成三問が惨殺、粛清される。朴彭年・成三問・李塏は、他の河緯地・兪応孚・柳誠源などとともに「死六臣」の内に数えられて朝鮮史の中でその節義が高く顕彰されることになる。その一方で、鄭麟趾・申叔舟・尹子雲・崔恒など、安平大君におもねるような詩文を寄せていた人びとが、安平大君に死を命じ、あるいはその妻子を奴婢に落とす決定にまで組し、いや提案までした上で、世祖の時代を支えて業績をあげ、出世の階段を昇って行くことになる。

「夢遊桃源図」は謎の多い作品であると思う。寓意的に解釈しようと思えば、どのようにでも解釈できる。作者の安堅についても、稀代の書画の収集家であった安平大君の書庫に自由に出入りして中国の画家たちの画風を学んだとされ、安平大君との結びつきは並々のものではなかった。それゆえ、安平大君と運命をともにして死んだという説があり、また、「癸酉靖難」の直前に、貴重な墨を懐に入れて安平大君の不興を買い、大君邸を出入り禁止となって事変に巻き込まれるのを免れたという話も伝わっている。しかし、それも、危険を察して、稀代の画才の失われるのを惜しんだ安平大王の打ったお芝居だという話にもなる。

さて、絵画の構成は、向かって左側に俗界が描かれ、中央に溪流が流れて、右側には桃源郷そのものが描かれている。その鑑賞は別の機会に譲るとして、気になることがある。桃源郷は山深く俗界を隔てるものの、人びとが平和に暮らす村落であるはずである。陶淵明の文章には次のようにあった。

韓国と日本における「桃源郷（ユートピア）」の比較

土地平曠，屋舎儼然，有良田美池桑竹之属，阡陌交通，鶏犬相聞，其中往来種作，男女衣著，悉如外人，黄髮垂髫，怡然自樂。

（土地は平で広く，家屋などが整然と立ち並んでいる。肥沃な田んぼがあり，美しい池があり，桑や竹が生えていて，東西南北の四方に道がこもこも通じている。鶏や犬の鳴き声が聞こえ，その往来や種の植え方，そして男女の衣服などは，すっかり異国の人のものである。髪の毛の黄ばんだ老人，おかっぱの子どもたちがみな喜んで遊んでいる）

陶淵明の描いた桃源郷は平和な田園風景のはずなのだが，安堅の「夢遊桃源図」ははたしてどうであろうか。「夢遊桃源図」には人間は描かれていない。安平大君自身の跋文には，「余與仁叟，策馬尋之」とあって，自身と仁叟，すなわち朴彭年はいなくてはならないし，さらには「傍有数人在後，乃貞父，泛翁等」とあるから，貞父・崔恒と泛翁・申叔舟がいたことになるのだが，彼らも描かれていない。もちろん，陶淵明の「記」にはある，髪の毛の黄ばんだ老人もいないし，おかっぱの子どもたちが遊び回ってもいない。田夫野人はいないのである。そして，鶏も犬もいない。夢の世界には音声が付いているとでもいうのであろうか，実は安平大君自身が跋文で，「無鶏犬牛馬」，すなわち鶏も犬も牛も馬もいないとわざわざ断っている。農村には欠かせない家畜たちだと思われるが，いったいどうしてなのだろうか。動物忌避の深層心理を心理学者に尋ねてみたい気もするが，まさか安堅には動物は描けないからというのでもないであろう。陶淵明が記している，人びとが牛馬とともに耕作をし，鶏や犬の鳴き声が聞こえるのどかな農村風景ではないのである。屋舎は描かれてはいるものの，それは田舎の百姓屋ではなく，山に寄り添った楼閣風の建物である。生活者たちのいる風景ではなく，神仙の世界であるというしかない。

朝鮮社会の最上層には庶民の生活への視線が欠落しているとまでいうの

は飛躍に過ぎるだろうか。東洋の山水画はそのようなものといってしまうと、その通りであり、この絵画の傑作たる位置をいささかも傷つけるものではないが、「夢遊桃源図」の桃源郷には生活者への視点はなく、みずからその渦中にある最上層内部での権力闘争に対する嫌悪と倦怠とそこから逃避しようという姿勢をそこに見るべきであろう。

二、『洪吉童伝』のユートピア（1）—子ども殺しと父親殺し—

盗賊の親王であった洪吉童は最後には絶海の孤島に王国を築く。そこに作者の許筠（1569～1618）の思い描いた理想郷が表現されていると思われるが、実は、『洪吉童伝』のテキストにはいくつものヴァリエーションがあって、いずれもが許筠の死後かなり経ってのものであり、現在のこっているテキストから許筠の思想を抽出することは困難なのかもしれない。どのテキストを選ぶかは重要な問題なのだが、ここでは『洪吉童傳・壬辰録・辛未録・朴氏夫人傳・林慶業傳』（韓國古典文學大系1 教文社 1984年11月）を使う（韓国での発表の際には、準備をバリ滞在中にしなければならず、また発表が英語であったために、にインターネットで出すことのできた Seoul Xylograph (Kyongp'an-bon) から Marshall R. pihl, Jr. が翻訳したものを使ったのだが、引用部分を韓國古典文學大系本にものに改めることにした。こちら京板本を底本としており、若干の相違を見せるものの、同一系統のものである）

それにしても、韓国でのハングル小説の嚆矢である『洪吉童伝』の著者の許筠の兄弟たちの多才ぶりには驚かされる。陽川許氏の同知中枢府事の許晔を父として、兄にはまず吏曹判書にまでなり、壬辰倭乱の前に日本に來たことのある許篈（1548～1612）がいて、女真族や倭寇との歴史的な関係を実に詳しくたどっていて興味深く、他の野談とは異彩を放っている『海東野言』を書いた許篈（1551～1588）がいる。そして、姉には朝鮮朝

韓国と日本における「桃源郷（ユートピア）」の比較

随一の女流詩人といっている蘭雪軒・許楚姬（1563～1589）もいる。しかし、天は非情というべきか、あるいは人みなに公平というべきか、才能に恵まれた分、許家の兄弟姉妹たちは薄命で非業の死を遂げている。蘭雪軒は二十代の若さで死に、許筠は流罪になって後、政治に倦んで大酒を飲みながら放浪して客死、『洪吉童伝』の作者の許筠も光海君の時代に政争の渦中で斬刑にあった。実をいうと、陽川許氏にもう一人気になる人物がいる。東洋医学の集大成といっている『東宝医鑑』を完成させた許浚である。許筠兄弟たち近辺の人物であることは確かだが、それこそ『洪吉童伝』の重要なモチーフである庶子であるために系譜を明らかにすることができない。

さて、『洪吉童伝』は次のように始まる。

「さて、朝鮮国は世宗のみ代、一人の宰相がいたが、姓は洪で、名は某であった」

テキストによって、時代を特定させないものもあり、「宣宗（祖?）」の時代とするものもある。きわめて開明的で韓国きっての文化的な英雄でもある世宗の時代のこととするかどうかで、物語の奥行きが随分ちがってくるはずである。そして、許筠が執筆した時期が、最近ではその評価は変わってきてはいるものの、暗君とされる光海君の時代であることを考えれば、そこには作者のイロニーを読み取るべきなのかもしれない。作者の底意には計り知れないものがあるように思われる。

そんな開明的な啓蒙君主のもとでも理不尽なことはある。生い立ちによる差別である。

「はやく二人の息子を持ったが、一子は名が仁衡、正室の柳氏の生むと

ころ、もう一子は名が吉童、侍婢の春蟾の生むところ」

父親の大臣には二人の息子がいて、兄は正妻の子、そして、弟の吉童は妾の子だったということになる。日本では伝統的に正妻の子と側室の子との間でそれほど差異を認めない。ところが、朝鮮王朝では違う。吉童は幼いころから気骨が非凡で英雄豪傑の気象を見せて、父の大臣も愛情を注いだものの、制度として、側室の子は正室の子と同じように扱われてはならない。

「大臣は愛情を降り注いだものの、根本は賤しい生まれ、吉童が父さんと呼んだり、兄さんと呼んだりするごとに、まずは叱りつけて、そうは呼ばせない。吉童も十歳にもなると、もう父さんとも、兄さんとも呼ばず、奴婢たちも自分たちと同等に扱って、自己の賤しさを骨身にしみて痛恨するのであった」

父を父と呼ぶことができない、また兄を兄と呼ぶことができない、朝鮮時代の庶子の差別の実態がここには書かれている。『経国大典』を繙いてみると、庶子差別の項目をいくつか拾うことができる。そのいちいちを挙げるのは煩瑣なので、ただ一つ、科挙の受験制限について挙げてみる。

【諸科】三年一試前秋初試春初覆試殿試文科則通訓以下（武科同）生員・進士則通徳以下許赴（守令則勿許赴生員進士試）○罪犯永不叙用者賊吏之子再嫁失行婦女之子孫及庶孽子孫勿許赴文科生員進士試非居本道者朝士見在者勿許赴郷試（若承差受暇者在此限並武科同）

（三年に一度の科挙を行う。前年の秋に初試を行い、初春に二次試験すなわち宮廷での試験を行う。文科には通訓大夫以下が受験でき（武科も同じ）、

韓国と日本における「桃源郷（ユートピア）」の比較

生員・進士科には通徳郎以下が受験できる（守令は生員科，進士科に応試を許さないこととする）○罪を犯したことから永久に任用されることがなくなった者，汚職をした役人の子，再婚したり品行の悪い女子の子および孫，そして庶子たちは文科も，生員科も，進士科も受験することを許さない。その地方に住んでいない者，ソウルで官職に就いている者は地方の一次試験を受けることを許さない（王命を受けて地方に派遣されている者はこの限りではない。武科もすべて同じ）

朝鮮王朝は高度に発達した官僚制国家であり，科挙試験に及第して初めて出世の道が開けるが，庶子にはその道があらかじめ閉ざされていることになる。モンテスキューの『法のスリット（De L'Esprit des Lois）』に「さまざまな政治形態における庶子について（Des Bâtards dans les divers Gouvernements）」という項目が設けられている。

したがって，一夫多妻制が認められている国々では，私生子はほとんど知られない。これが知られているのは一妻制の法律が確立している国々である。これらの国々では同棲関係に不名誉の烙印を押さなければならなかった。したがってそこから生れた子にも不名誉の烙印を押さなければならなかったのである。

習俗が純潔でなくてはならなかった共和政の国々においては，私生子は，君主政の国々におけるよりいっそう憎むべきものとされざるをえない。

ローマでは彼らに対してあまりにも厳しい規定をこしらえたとみられるであろう。しかし，古い諸制度は全公民に結婚させるべく定めていたが，他面では婚姻は一方的離婚または協議離婚の許可によって緩和されていたので，同棲関係に墮落することになったのは極めて重大な道徳的腐敗による場合だけであった。

民主政の国々では、公民の資格は、それが至高の権力を伴っているのが重大であるが、そこでしばしば私生子の身分に関する法律が生れた。これには、婚姻という事柄自体やその貞節よりも、むしろ共和政に特有の国制に関係があったということは注意すべきである。こうして人民は、ときには、お偉方に対して自分たちの権力を増大するため私生子を公民として受け入れた。こうしてアテナイでは、人民はエジプト王が自分たちに多くった穀物のより大きい分け前を得ようとして、私生子を公民の数から削った。最後に、アリストテレスは、次のようなことをわれわれに教えている。いくつかの都市では、十分な公民が存在しないときには私生子が公民たるの地位を取得し、そして十分の公民が存在するときには彼らは取得しなかったと。(モンテスキュー／野田良之他訳『法の精神 中』岩波文庫による)

On ne connoît donc guère les bâtards dans les pays où la polygamie est permise. On les connoît dans ceux où la loi d'une seule femme est établie. Il a fallu, dans ces pays, flétrir le concubinage; il a donc fallu flétrir les enfants qui en étoient nés.

Dans les républiques, où il est nécessaire que les mœurs soient pures, les bâtards doivent être encore plus odieux que dans les monarchies.

On fit peut-être à Rome des dispositions trop dures contre eux. Mais les institutions anciennes, mettant tous les citoyens dans la nécessité de se marier, les mariages étant d'ailleurs adoucis par la permission de répudier, ou de faire divorce, il n'y avoit qu'une très grande corruption de mœurs qui pût porter au concubinage.

Il faut remarquer que la qualité de citoyen étant considérable dans les démocraties, où elle emportoit avec elle la souveraine puissance, il s'y faisoit souvent les lois sur l'état des bâtards, qui avoit moins de rapport à la chose même et à l'honnêteté du mariage qu'à la constitution particulière de la

république. Ainsi, le peuple a quelquefois reçu pour citoyens les bâtards, afin d'augmenter sa puissance contre les grands. Ainsi, à Athènes, le peuple retrancha les bâtards du nombre des citoyens, pour avoir une plus grande portion du blé que lui avoit envoyé le roi d'Egypte. Enfin, Aristote nous apprend que, dans plusieurs villes, lorsqu'il n'y avoit point assez de citoyens, les bâtards succédoient, et que, quand il y en avoit assez, ils ne succédoient pas.

モンテスキューのこの文章はさまざまなことを考えさせる。日本で庶子があまり問題にならないのは、本質的に多妻制（polygamie）の社会であるからであり、正妻と妾との区別が曖昧だからということになるであろう。一妻制（monogamie）の社会でこそ妻以外は妾としてはっきりと区別され、その子もまた差別されることになる。朝鮮王朝はもちろん王政であり、共和政ではないのだが、極度の儒教社会であり、儒教倫理の清浄 pure な慣習が求められることになって、庶子が醜惡 odieux なものと見なされることになる。父親は自己の odieux な行為をその子どもの存在に転嫁させて自己の odieux さを韜晦して責任を逃れるのである。モンテスキューはまた、アテネではエジプトから送られる「麦の分け前（portion du blé）」が減るから、庶子を市民とは認めなかったというのだが、庶子を子どもと認めるかどうかは、結局は「麦の分け前」に関わっている。朝鮮王朝の場合でも、「麦の分け前」は文字通りに解釈してもいいが、科挙で問題とすれば、官職の数ということになる。官職の数は限られているのに、庶子にまでそれを回すことはできないということになる。

しかし、もっと本質的な問題がありそうである。『洪吉童伝』において父が自分を父と呼ばせないというのは、実は父は子を殺していることと同義ではないのか。大臣のもう一人の妾である楚蘭は、自分の方には子が生れず、吉童とその母に大臣の愛情が注がれるのが憎くてたまらない。そこ

で、女占い師に吉童がかならず大きな禍を為すと占わせ、吉童を亡き者にしようとはかり、そのことを大臣にも提案する。

『先日の女占い師の占いは鬼神のように当たります。吉童の今後をどのように致しましょうか。賤しいわたくしめも怖くて、恐ろしく、早くあの者を亡き者にするにしくはありますまい』

公はこの言葉を聞いて、眉を顰め、

『そのことは私の腹中にもないわけではないが、お前はこのことをもう口に出すな』

といって、部屋に閉じこもり、そのまま心は茫然として、夜になっても寝付かれず、ついには病に伏してしまった』

妾の一人の楚蘭が吉童を殺すことを提案しているのだが、このテキストでは父親はその計画も腹中にあるといいながら、茫然と悩んだ末に、病気になってしまった。楚蘭は刺客を雇って吉童殺しを実行に移そうとするのだから、父親は決断を回避して寝込んでしまったものの、同意したのも同然である。他のテキストでは、父親が吉童を殺すことを決意するものもある。物語のその後の展開でも、父親は父親としての包容力や優しさを見せるようであり、吉童を圧殺しようとする権力に対して反対はせず、むしろ同意している。しかし、問題はそんなところにあるのではない。吉童がそんな父親を完全に捨てることができないことの方が重要だと思われる。父は子どもを殺すことはできるが、子どもは父を殺すことはできない。すくなくとも東洋の社会ではそうである。

筆者は個人的な研究課題として、さまざまな社会と文化における親殺し(parricide)と子ども殺し(infanticide)について、多年、考え続けている。フロイドのエディプス・コンプレックスについてここで繰り返す必要はあ

るまいが、フロイドはその『トーテムとタブー』において 人類の文化が成立するそもそもの契機となったもっとも原初の事件として父親殺しを扱っている。その理論の当否はともかく、シェークスピアやドストエフスキーに親しんだ経験のある人間には、parricide がたしかにヨーロッパの文化を理解する重要な鍵になるという理論は十分な説得力をもつ。発表者は先日たまたまルーアンに行き、フローベルが「Saint Julien l'Hospitalier」の題材にした大聖堂のステンド硝子を見たが、聖ジュリアンが聖ジュリアンたりえたのは父母を殺した上でのことである。ステンドグラスの物語を見上げると、中央のあたりにベッドに横たわる父母を殺してしまう場面があった。フレイザーが『金枝篇』で展開した régicide（王殺し）が parricide の延長線上にあるというのは説明を必要としないであろう。しかし、フロイドの理論はヨーロッパ文化を理解するには有効ではあっても、人類普遍の文化を理解するには十分ではないように思われる。東洋ではむしろその逆に infanticideの方が重要なのではないだろうか。「孝」という文字は「土」の下に「子」を埋めて「ノ」で突き刺す形である。この字源解釈はもちろん誤りだが、「孝行」を最重要の徳目とする儒教は、人間の本性はともすれば逆の方に流れがちだから、それへの戒めだと考えとしても、つまるところは親が子どもを殺しているのではないか。

パリで「Pourquoi j'ai pas mangé mon pere?（僕はどうして父さんを食べなかったのか）」というアニメ映画が上映されていた。樹上で生活していた猿人が地面に降りて二足歩行を初め、火の使用を覚える。人類の進化をアニメにしたものである。その原作は「Evolutional Man（進化人間）」という英語の小説らしいのだが、私が手に入れたフランス語訳の本の題名は「Pourquoi j'ai mangé mon pere?（どうして僕は父さんを食べたのか）」であり、否定詞の「pas」はなかった。ちゃんと食べているのである。フロイド理論にのっとった人類社会の進化を読み物にしたもので、当然そこ

では父親は子どもたちに殺され食べられてしまうのだが、アニメ映画にするには、お父さんは殺さず、食べもしなかったことにするしかなかったのであろう。

日本の江戸時代の演劇である人形浄瑠璃や歌舞伎においてはしきりに子ども殺しが演じられる。たとえば、『菅原伝授手習鑑』では、松王丸は主家筋の菅丞相の子の菅秀才の命を救うためにわが子の小太郎を寺子屋に送り込み、武部源蔵に小太郎を殺させる。松王丸がわが子小太郎の首を見ながら、菅秀才の首に間違いなし、武部源蔵、よくやったといったのけるところが見せ場になる。あるいは『義経千本桜』では、鮎屋の弥左衛門は、守るべき平維盛と若葉の内侍、そして若君六代を敵方に売ったということで、やくざ者の息子の権太を刺し殺すが、権太は維盛一家を救うために自分の妻と息子を犠牲にしていた。つまり、二代にわたって子ども殺しが行われていることになる。そして『妹背山婦女庭訓』では、弥生の雛祭りのころ、桜花爛漫の吉野川を挟んで、妹山の方では母親の定高が娘の雛鳥を刺し殺し、背山の方では父親の大判事が息子の久我之助に切腹をさせ、少年・少女は首同士の結婚式を挙げる。これらは代表的な例であるが、お芝居のクライマックスの多くは子どもが死ぬ場面である。あまり必然性があるとも思われない場面で、子どもたちは殺され、あるいは半ば強制的な形で自殺させられる。観客はそれを見て涙を流すのだが、主人のために、あるいは主人の子どもの身代わりとして自分の子どもを殺すのは「忠」であり、殺される子は「孝」の徳目を果たすことになる。それは江戸時代だけのことでなく、日本の親たちが20世紀に戦争に子どもを送り出した心理構造そのものでもあり、私たちはそれをけっして笑うことはできない。

朝鮮社会ではどうなのだろうか。娘の沈清は自分を育ててくれただけで、他には何の価値もないように見える父親のために海の底にまで飛び込んで、わが身を犠牲にするのを顧みない。『沈清伝』がすこぶる人口に膾炙した

韓国と日本における「桃源郷（ユートピア）」の比較

物語であり、韓国の人びとの心に訴えかけ、その心性にしみこんでいるとすれば、その孝行心は尊いが、やはり、子ども殺しの文化なのである。恵慶宮洪氏はジェーン・オースティンやブロンテ姉妹に匹敵する優れた世界的な女流文学者だといってよいように思われる。その『閑中録』は、英祖と思悼世子の父子間の葛藤を極めて冷静に見つめ、当事者の心理を的確に分析してみせる。強大であり、そしてその名前の通り、英邁だった父親の英祖に対して思悼世子は萎縮していき、狂気に陥り、宦官や宮女を殺し始める。誤解を恐れずにいえば、思悼世子が殺すべきは父親の英祖ではなかったろうか。ヨーロッパでは予定調和的にそうなるはずである。しかし、東洋の朝鮮では、父の英祖に命じられて思悼世子は唯々諾々と米櫃に入れられて餓死させられることになる。子どもの方が殺されるのである。

三、『洪吉童伝』のユートピア（２）—龍殺しの末に—

膂力に勝る洪吉童は刺客は返り討ちにしたものの、楚蘭はあくまでも父の寵妾なので殺すわけにもいかない。家に居場所はないと判断した吉童は父親に暇乞いをして出ていく。

「さて、吉童は父上・母上に暇乞いして門を出ていき、漂泊の身の上になって、あてもなくさまよい歩いたが、行き着いたのは景概絶勝の地である。人家を探してさらに分け入っていくと、大きな岩の下に石門が閉じてあり、静かにその門を開けて中に入って行った。すると、やにわに広い原っぱが広がり数百戸の人家が櫛比しているではないか」

まさしく桃源郷である。『青邱野談』や『溪西野談』といった朝鮮時代の野談の中にはいくつかこうした山中の村落が描かれる。風水師の南師古の「東国十勝選」というのも、やはり海辺の村などではなく、人跡をとだ

えた山中の村である。しかし、朝鮮の人々にとって「桃源郷」はまた特別な意味合いをもつことになる。陶淵明の「桃花源記」では、漁人が山中に分け入ったのが晋の太元中のことであり、桃源郷に住む人びとの祖先は秦末の混乱を避けて移り住んだので、人びとは漢や魏の興廃を知らず、その間の絶えざる戦乱とは無縁に過ごしたというのであった。朝鮮ではそれらが得難い土地であるもっとも重要な理由として、景勝の美しさや気候の温暖さよりも、まず日本人がけっして入ってこない土地であることがあげられる。海辺ではいかに景色がよくても、倭寇たちがほしいままに略奪に及んで安穩に暮らすことはできない。南師古の「十勝」などが後に評価されるのも、実際に壬辰の倭乱においても豊臣秀吉の軍は入ってこなかったということによる。このことについてはいずれ論じたいと思うが、一方で山中の村は官憲の目の届かない場所でもあり、盗賊たちのアジトにもなる。「緑林党」ということばがあり、シャーウッドのロビンフッドよろしく、義賊たちが隠れ住み、里に下りて行つては権門富豪の家に押し入って強盗を繰り返す。吉童も桃源郷に入り込んで、俗世間に下りて行くことなく、吉童が農耕にいそしんで大人しく過ごすということはなかった。盗賊のアジトに入り込んで、英雄豪傑の気象をもつ彼はそのまま盗賊団の首魁になってしまう。だが、あくまでも義賊であつて、貧しい人々を救済する「活貧党」を名乗って、特に語られるのは、海印寺と咸鏡道監司への痛快な謀議を練った上での強盗行為である。海印寺は高麗大藏經の経板を保存し、由緒あるばかりでなく、権威を備えた寺刹であるが、そこに押し入り、警戒の厳しいはずである地方行政の拠点である監司にも押し入るというのは、朝鮮時代の仏教寺院の腐敗と地方官衙の人々からの収奪への批判の意味が込められているのであろうが、暴力よりも頭脳を使い、僧侶や警察権力を翻弄する盗賊ぶりは痛快である。

しかし、国家権力への反抗は長くは続かない。父と兄が出て来て、吉童

韓国と日本における「桃源郷（ユートピア）」の比較

に投降を呼びかけるからである。そのとき、五倫、すなわち儒教道徳が説かれる。吉童は父と兄の呼びかけに応じて投降するが、罰されることはなく、兵曹判書の官職を与えられることになる。『経国大典』の「兵典」に、庶子は「補充隊」に入れられるというような条文がある。その大臣に抜擢されるというのは、作者に何か意図するところがあると思われる。しかし、吉童は兵曹判書の職務は果たすことはない。朝鮮を捨てて海に出るのである。

そこでまず、怪物を倒す。その怪物がどのような形をしていたかは語られないが、吉童はここでベオウルフやジークフリートや聖ゲオルグのように龍殺し（dragon slayer）となる。それが父親殺しの代替となると考えていい。この龍殺しによって、吉童は盗賊の親玉ではなく、真正の王となる。まずは小さな島々を制圧し、次に聿島国を征服して王となることになる。

「王が国を治めること三年、山に盗賊はいず、道に落ちたものを拾う人はいなかった。まったくの太平聖代というべきであった」

現実にはどのような政治を行って、平和な国を作ったのかは語られていないのだが、自分自身は盗賊だったのに、盗賊は一掃されたとわざわざ断るところが面白い。自分は庶子差別があったから盗賊になるしかなかった。だが、この聿島国にはそのような差別がないということになるかもしれない。

四、『好色一代男』のユートピアとしての女護の島

『好色一代男』はその名の示す通り、好色本である。主人公の世之介は七歳のときから女性を経験して「五十四歳までたはぶれし女三千七百四十二人」とある。最近パリのバスティーユで見た『ドン・ジョヴァンニ』で

は舞台を現代に設定し、執事のレボレロがドン・ジョヴァンニのこれまで関係した女性のカタログを取り出す場面では、携帯電話のアドレスを検索する場面にアレンジされていて斬新だった。ドン・ジョヴァンニについては、「イタリアでは七百四十人、ドイツでは二百三十一人、フランスでは百人、トルコでは九十一人、そしてスペインではなんと千三人」ということになり、「スカートをはいてさえいれば (purché porti la gonnella)」, 国籍も老若も貴賤も美醜も問わないというのだが、しかしドン・ジョヴァンニの相手はあくまでも女性である。世之介の場合は「少人のもてあそび七百二十五人」と続いていて、主人公の世之介は同性愛も拒んでいない。ちなみに、西鶴の『武道伝来記』および『武家義理物語』という武士道を描くといわれているものの多くも実は同性愛を描いたものである。

世之介は放蕩生活が続けるごく早い段階で、「勘当」を受けている。これを「子ども殺し」と位置付けることも可能であろう。しかし、久離を切るとはいいながらも、一時的であり、後には許され遺産を相続することになる。「合二万五千貫目、母親よりずいぶん使へと譲られ」、「明け暮れたはけを尽くし」たのである。洪吉童の盗賊としての活躍には世之介の異性（時には同性）との色事が対応する。色事も悪徳だとすれば、どちらも悪を賛美する一種のピカレスク小説だといっていいが、行為の志向する対象が異なることになる。そうして日本全国津々浦々の遊女町をめぐるの数多くの性体験が描かれた果てに、気が付くと、本卦がえりの年齢である。そこで、わが身を振り返り、悟りすまして仏道にでも入れればいいわけだが、世之介はそうはならない。「死んだら、鬼が喰ふまでと、俄にひるがへしても、有難き道には入り難し」と見事な腹のくくり方といわなければならない。結尾では、「好色丸」と名付けた舟に乗って海に乗り出すことになる。吹流しは吉野太夫の下着を使い、幔幕はなじんだ女性たちの着物を縫いついだもの、床には遊女評判記をしきつめ、綱は女たちの髪の毛を撚っ

韓国と日本における「桃源郷（ユートピア）」の比較

たものである。さらに積み込んだものがある。

さて台所には生舟に鱈をはなち、牛房・薯蕷・卵をいけさせ、櫓床の下には地黄丸五十壺、女喜丹二十箱、りんの玉三百五十、阿蘭陀糸七千すじ、海鼠輪六百懸、水牛の姿二千五百、錫の姿三千五百、革の姿八百、枕絵二百札、伊勢ものがたり二百部、犢鼻褌百筋、のべ鼻紙九百丸、まだ忘れたと丁子の油を二百樽、山椒薬を四百袋、糸のこづちの根を千本、水銀・綿実・唐からしの粉、牛膠百斤、

まったく馬鹿げたことが書かれている。この船には精力をつけるための食べ物、あらゆる性具、催淫剤、ボルノグラフィー、そして堕胎薬まで、用意万端、いささかの怠りもない。そして、六人の同じく遊び仲間を誘って、世之介は語りかける。

「されば、浮世の遊君・白拍子・戯女見のこせし事もなし。我をはじめて此男どもここに懸る山もなければ、是より女護の嶋にわたりて、つかみどりの女を見せん」

われわれにとってもう日本でやり残したことはない。そこで海を越えて女だけが住んでいる女護の島に行って、手当たり次第に女と交わろうというのである。この世之介のこのことばに应えて、仲間たちは即答する。

「譬ば腎虚してそこの土と成べき事。たまたま一代男に生れての、それこそ願ひの道なれ」

腎臓が空っぽになり、命が尽きて灰になるまで大勢の女性と交わるのは

男子としての本懐だ、好色こそわれわれの人生だというのである。そして、ついに海に乗り出すのだが、それが天和二年（1682）の十月のことだったとしている。

韓国の真面目な学会の席でこんな話をするのは不謹慎かもしれないと憚られたが、実は以下の発表者の西鶴の『好色一代男』の解釈は筆者の恩師である野間光辰先生の説に全面的に依拠している。今回、調べ直してみてもわかったのだが、野間先生の説はかならずしも現在の江戸文学の学会の通説にはなっていない。むしろまったく孤立していて、ほとんど顧みられていない説であるようにも思われる。『好色一代男』の末尾はやはり脳天気な男たちの漁色の願望を語っているに過ぎないというのが現在でも一般的な見解のようで、コレージュ・ド・フランスの研究会でいっしょだった、現在のフランスでの江戸文学研究の第一人者であるダニエル・ストルーヴ氏も野間先生の説には意をとめておられなかった。

野間先生の所論を紹介する前に、すこし個人的な懐古談をすることを許していただきたい。野間先生は江戸文学の大家であった。いつも羽織袴で通され、キセルを使って煙草を吸われた。大学には家からは通われず、島原か祇園から通われているという噂もあった。江戸時代の性についての百科全書ともいえる『色道大鑑』も出されていて、さもありなんと思われたものの、本当のところどうだったかは知らない。発表者が四年生になった歳には退官されたので、一年間しか教わらなかったし、発表者は平安文学を専攻したので、直接に野間先生に師事したわけではない。ただ、当時はまだ走っていた京都市内を走っていた市街電車で帰りにごいっしょすることがしばしばあって、その話には教えられることが多かった。まだ二十歳の学生には、遊郭での諸分けなど刺激的に過ぎたが、あるとき、野間先生がおっしゃったひと言が耳に焼き付いている。

「西鶴の女護の島というのは実は八丈島のことなんや」

八丈島は旧来の母系制度，あるいは母方居住の制度が残っていたから女護ヶ島と呼ばれたのだろうが，平安時代の古くから流刑の島だった。『好色一代男』の末尾はただ単純に男の享楽願望を語るだけのものとはいえない。野間先生のこのお話は，他の江戸時代の清雅きわまりないお話とともにずっと記憶に残っていたのだが，しかし，その先生の論文を丹念に読んだわけではなかった。今回，この発表のために必要となり，フランスにコピーを送ってもらった（「西鶴と西鶴以後」『岩波講座 日本文学史 第十巻 近世』昭和37年7月 所収）。筆者が野間先生と接することができたのは，まだ学生紛争の余燼がくすぶっていたころのことである。先生は学生紛争にかかわった学生に対して厳しい態度を持されていたし，なんらシンパシーを持っていらっしやらなかったようにも見えた。その十年近く前に書かれたこの論文は，しかし，時代と社会に対する切込みが思いのほか鋭く，先生の西鶴理解の深さにあらためて瞠目させられる思いがした。

世之介は享楽を追求しようとしたわけではない。

「享楽の追求どころか，女護の島は鳥も通わぬ，恐ろしい流刑の島だったのだ。それは八丈島である。常人には窺うことの出来ぬ神秘にとざされていたがゆえに，古来女護の島といい伝えられて来たが，王朝の昔から，そして徳川時代を通じて，八丈島は流人の涙と恨に包まれた島であったのだ。そう思えば世之介の女護の島渡りは，最も深刻な絶望の表現，悲愴極まる捨身の行でなくて何であろうか」

女護の島に「女をつかみどり」にしようとして渡航するというのは，「最も深刻な絶望の表現，悲愴極まる捨身の行」とまで言い切られている。このような読み方をしている学者は他に誰もいない。しかし，野間先生のこの読み方こそが『好色一代男』の核心を突いているであろう。その女護の島への渡航が行われたのは「天和二年神無月」と，作品の中にははっきり記されているが，これは『好色一代男』の出版のときと重なっている。

西鶴をこのように絶望させたものについて、野間先生は次のように述べる。

「延宝八年からの三年間は、大風雨・洪水・冷害・凶作・米価昂騰・飢饉が打続いて、いわゆる世並みが悪かった。ことに延宝九年（1681）二月に始まった飢饉の現象は全国的な広がりを持って、年を越えた天和二年春夏の頃に至るも終熄せず、窮民続出し餓死人道路に満つといった状態であった……しかし、天災地変よりももっと恐ろしく、諸人息を詰めて震えあがり、そして怨嗟の声を放ったのは、秋霜烈日の如き綱吉の法度政治、恐怖政治であった」

徳川綱吉の政治については評価が分かれている。有名な「生類憐れみの令」という悪法を敷いた反面、また湯島聖堂を建て、儒教を奨励して文治主義を徹底しようとした将軍でもある。しかし、野間先生は、綱吉みずからは儒教的な賢君明主を意識して振る舞ったものの、やはり希代の悪君であったと考えている。「秋霜烈日の如き綱吉の法度政治、恐怖政治」のいちいちについて、もうここでは挙げない。

五、終わりに

実際には桃源郷の比較研究の出発点に立ったばかりであるが、発表を終わらせなくてはならない。

世之介の色恋の一つ一つも、徳川綱吉の恐怖政治のもとでの一種の反抗精神の表現だったといえる。そして遂には日本に嫌気がさして、絶望の果てに、女護の島に渡航を企てる。江戸時代の日本の朱子学が朝鮮朱子学の多大な影響を受けている以上、綱吉も世宗のことは知っていて、多分に模範にした君主であったに違いないのだが、後のそれぞれの国民の評価は随分違っている。洪吉童が対するのはやはり世宗であって、倫理的にならん問題はなく、すばらしく立派で、この上なく寛容な文治主義の君主であった。しかし、その秩序が謹厳な儒教に基づく以上、吉童は別の王国を海の

韓国と日本における「桃源郷（ユートピア）」の比較

外に求めるしかなかった。ともに「親殺し」が果たせないために理想郷を求めて海に出て島に渡ったが、一方は女性を「つかみどり」にする「女護の島」であり、もう一方は紀律ただしい「聿島国」であった。それが日本と韓国のそれぞれのユートピアの現れ方だったのである。ユートピアを夢見る心理には相似するものがあったても、ユートピアの現れ方はずいぶん違う。

この発表を準備したのは、パリのコレージュ・ド・フランスを受け入れ先として研修生活をしていたときであった。11月13日の金曜日があった次の週の16日の月曜日の正午にはコレージュの図書館の横の研究室から中庭に下りて、同僚たちといっしょにノートルダムで打ち鳴らされる鐘を合図に一分間の黙祷を捧げたのであった。私はフランス人ではないにしても、フランス革命によって実現された近代の価値観に対する挑戦を深刻に受け止めざるを得なかった。しかし、その近代的な価値観とは何なのかをあらためて考えるためにモンテスキューやボルテールなどを押っ取り刀で読み始めたのだった。上に引用したモンテスキューはそのときにたまたま突き当たった文章であり、さっそくこの発表に生かした。そして、ボルテールを読む過程で、啓蒙君主としてフレデリック2世に突き当たった。ボルテールが序文を書いて、その書物以上に立派な書物を、実際の統治によって著すことになろうといった、フレデリック2世の『Anti-Machiavel』を引用して（この書物についてはインターネットで読むことができた）発表を終えたい。物語の読者は洪吉童や世之介の立場に立って読むわけだが、みずからは賢君と思っていた綱吉あるいは真正の賢君であった世宗大王の立場からは次のようになるのではないだろうか。

たとえマキャベリがそうであればいいと欲したとおり、人間がご都合主義的にできているものだとしても、しかしながら、われわれがそれをまね

るべきだということにはならない。カルトゥーシュ氏は裏切り、盗み、殺害する。重ねられた数かずの審議の後に、私はこのことから彼は有罪だと結論する。彼を罰するべきであり、また裁判員たちは彼をみずからの行為のロールモデルとしてはならないと。チャールズ賢王は、世界には榮譽も徳もほとんど欠如しているとしても、王国にはその痕跡は見られなくてはならないと述べたのである。

Even if we assume that men are as opportunistic as Machiavel wants them to be, it would however not follow that we must imitate them. Mr. Cartouche betrays, robs, assassinates. After much consultation foregone, I conclude from this that Cartouche is a criminal, that one must punish - and not that the judges should use him as a role model for their own conduct. If the world had little honor and virtue, said Charles the Wise, it would be in the princes that one should find the traces of them.

カルトゥーシュは日本ではなじみのない名前であるが、もう五十年前にジャン・ポール・ベルモンドとクラウディア・カルディナーレが演じた映画があるらしい。18世紀初頭のパリを席卷した盗賊団の首領である。ちなみにミシェル・ムールの歴史百科事典を引いてみると、次のようにあった。

「CARTOUCHE, Loui-Dominique 1693～1721/11/27 有名な盗賊。樽屋の息子。ルイ - ル - グラン校で学業を始めたが（若いボルテールと同窓生であった）、放校処分になり、しばらくの間は軍務に服したが、後には盗賊団の首領となり、強盗や殺人を犯し、パリやその周辺を荒らしまわった。警察の十年にもおよぶ追跡によって捕縛され、グレヴ広場で生きたまま車責めにされた」

韓国と日本における「桃源郷（ユートピア）」の比較

警察権力から十年ものあいだ逃げおおせたというのは、やはり「義賊」であって、人びとのあいだに彼を庇護する空気があったということであろうか。しかし、為政者の立場からはやはりムッシュウ・カルトゥシュは有罪であり、罰さなくてはならないのである。

★参考のために許筠の略歴を記す。

許筠：1569～1618 朝鮮王朝中期の文人。字は端甫，号は蛟山。本貫は陽川。曄の三男。1594年，文科に及第して，議政府参判になった。1610年には北京に行って天主教にも触れたが，中国の小説類を耽読してみずからも小説や識記を書いた。庶流出身の李達に詩を学ぶためにみずからも庶民として振る舞った。光海君の暴政下，大北党に加担，1617年に逮捕されて，翌年には斬首された。